

今月の特集②

【酒造好適米の全体需給の推計】

農林水産省が本年7月に行った「酒造好適米等の需要量調査」の結果をまとめました。概要は次ページ以下でご紹介しています。より詳細な調査結果の内容は、下記URLよりご参照ください。

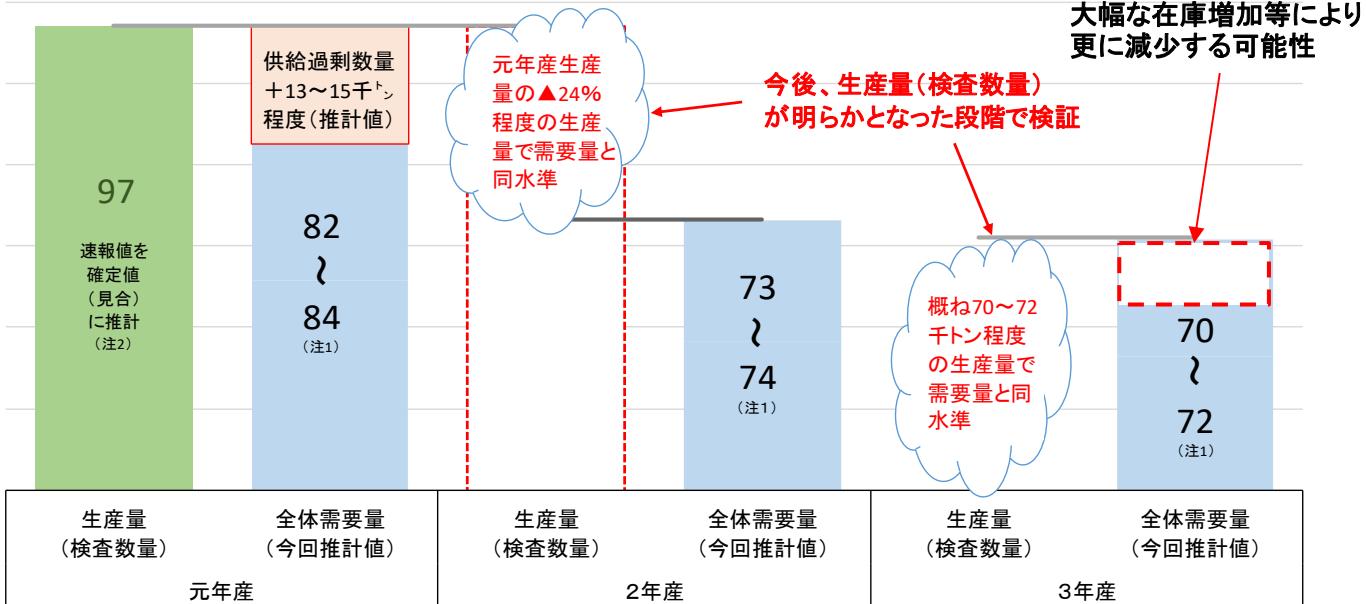
また、令和2年9月29日に「日本酒原料米の安定取引に向けた情報交換会」を開催したところであり、その概要については、同URLに追って掲載します。

https://www.maff.go.jp/j/seisaku_tokatu/kikaku/sake.html

- ・ 令和元年産については、全体需要量（推計値）と生産量（検査数量）を比較すると、+13～15千トン程度供給過剰となっていると推計されます。
- ・ 令和2年産については、全体需要量が令和元年産の生産量の▲23千トン（▲24%）程度と大幅に減少していることから、大幅な供給過剰となると見込まれます。
- ・ 令和3年産については、全体需要量と同水準の生産量とするためには、70～72千トン程度の生産量（令和元年産の生産量の▲26千トン（▲27%）程度）と大幅に生産抑制する必要があります。また、令和2年産において大幅な在庫の増加が見込まれることを踏まえると、需給均衡にはさらに大幅な生産抑制が必要と考えられます。
- ・ 令和2年産の需給については、令和2年産酒造好適米の検査数量（生産量）が概ね明らかとなる来年1月に検証し、2月号のマンスリーレポートでお知らせします。

酒造好適米(醸造用玄米)の全体需給の状況

(単位:千トン)



注1：各年産の全体需要量(今回推計値)は、今回の需要量調査の数量ベース回収率が、平成30年産酒造好適米の全体需要量(87～89千トン)と今回調査の平成30年産の需要量(約70千トン)から約79～80%と推計されるため、各年産の今回調査結果の需要量を当該割合で除することにより算出。

注2：生産量は、農産物検査数量(醸造用玄米)の値。ただし、令和元年産は、令和2年3月31日現在の速報値を直近3カ年の3月31日現在の進捗率により確定値見合いに推計。

酒造好適米の需要に応じた生産に向けて

- ・ 今後とも日本酒の国内外での円滑な出荷・販売のためには、原料となる酒造好適米についても需給均衡を図り、産地と実需者間で安定取引を図っていくことが重要です。
- ・ 令和3年産の酒造好適米の作付けに当たっては、産地品種銘柄毎の需要動向等に応じた生産・販売を行うほか、より的確な需要に応じた生産に資するためには、は種前に生産者と需
要者が契約を行うことや複数年契約の取組の拡大を推進することが重要です。

令和2年度酒造好適米等の需要量調査結果の概要

- 昨年に引き続き、酒造好適米の需要量を把握するため、日本酒の酒造メーカーを対象として本年7月に需要量調査を実施。

調査の概要

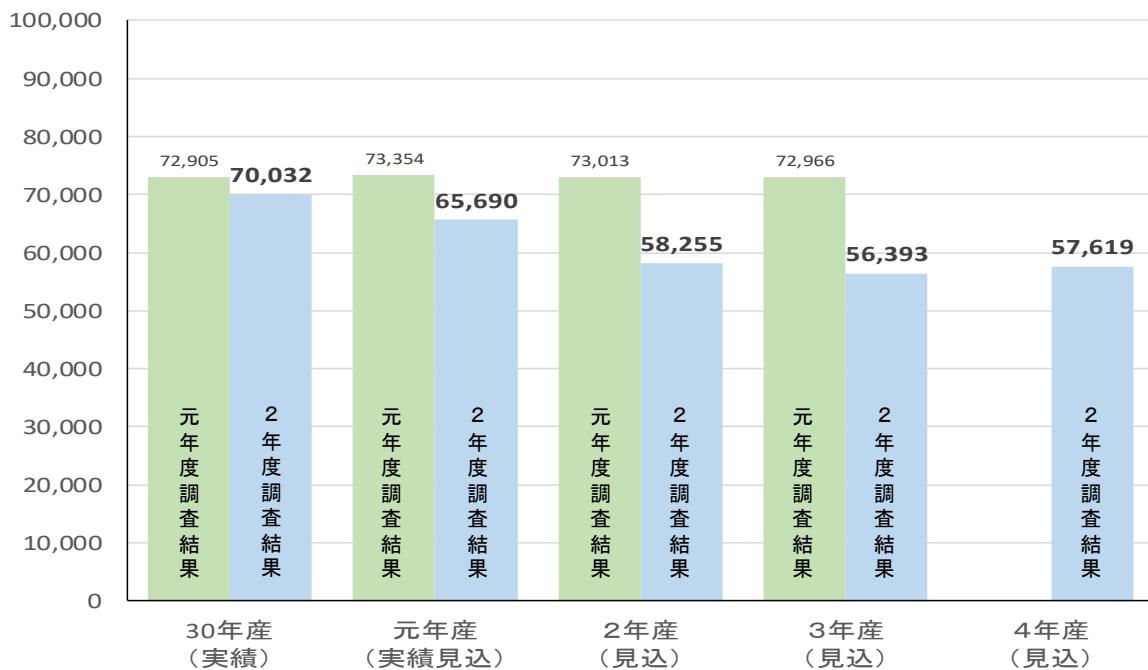
	令和元年度	令和2年度
調査期間	令和元年7月	令和2年7月
調査対象メーカー数	1,430社	1,421社
回答酒造メーカー数	763社	730社
回答率(数量ベース)	82~84%	79~80%

酒造好適米の需要量調査結果

- 今年度の酒造好適米等の需要量調査で回答のあった酒造メーカーの令和3年産酒造好適米の需要見込みは、合計で56千トンと平成30年産に比べて▲19%と大幅に減少するという結果になりました。
- 昨年度の需要量調査においては、令和3年産米の需要量は、平成30年産に比べて±0%でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大等の影響により、業務用の日本酒を中心に国内出荷量が減少し、輸出も大幅に減少していることから、需要量が▲19%となったと考えられます。
- また、令和元年産及び令和3年産の需要見込みについても、平成30年産を基準として昨年度の需要量調査からそれぞれ▲7%、▲17%分の需要量が減少しているため、在庫が大幅に増加すると見込まれます。

酒造好適米の需要量調査結果

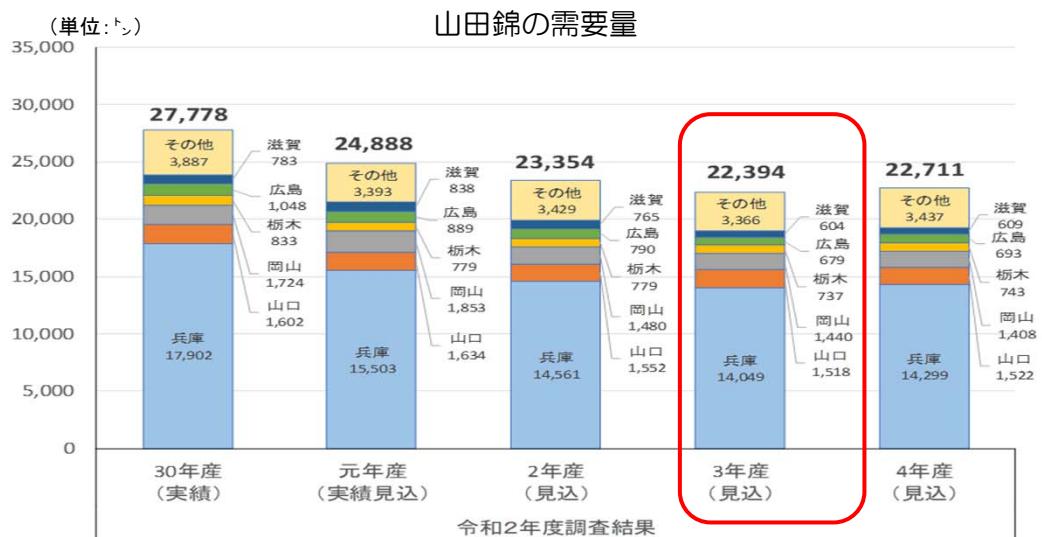
(単位:トン)



主な酒造好適米の需要量(酒造メーカーからの回答分)

山田錦

- 令和3年産の山田錦の需要量は、平成30年産に比べて▲19%と大幅に減少しています。
- 昨年度の需要量調査においては、令和3年産の山田錦の需要量は、平成30年産に比べて+1%でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大等の影響により平成30年産を基準として▲20%分の需要が減少したと考えられます。
- 令和3年産の需要量については、令和元年産及び令和2年産において大幅な供給過剰が発生し、在庫が大幅に増加した場合、更に減少する可能性があります。

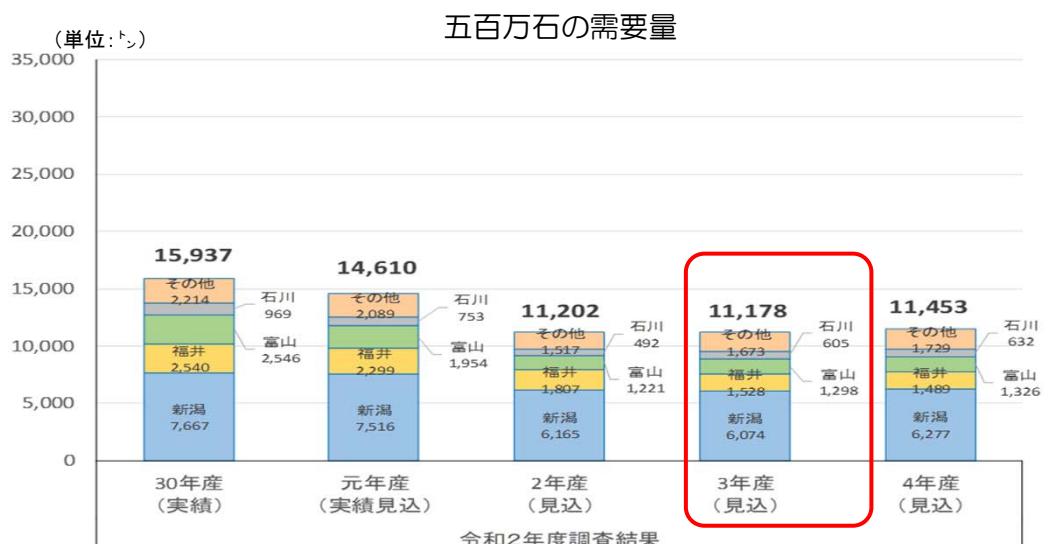


【参考】山田錦の生産量(検査数量)

38,431	33,916	34,631
(29年産)	(30年産)	(元年産(推計値))

五百万石

- 令和3年産の五百万石の需要量は、平成30年産に比べて▲30%と大幅に減少しています。
- 昨年度の需要量調査においては、令和3年産の五百万石の需要量は、平成30年産に比べて▲8%でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大等の影響により平成30年産を基準として▲22%分の需要が減少したと考えられます。
- 令和3年産の需要量については、令和元年産及び令和2年産において大幅な供給過剰が発生し、在庫が大幅に増加した場合、更に減少する可能性があります。



【参考】五百万石の生産量(検査数量)

20,564	21,203	19,588
(29年産)	(30年産)	(元年産(推計値))

日本酒の国内出荷状況

- 日本酒の国内出荷量については、近年、減少傾向で推移しているところですが、平成30年以降は減少幅が大きくなり、これまで堅調に推移していた特定名称酒についても減少に転じたところです。
- また、令和2年については、新型コロナウイルス感染症拡大等の影響により、業務用の日本酒を中心に国内出荷量が減少しており、特に酒造好適米を多く使用する特定名称酒が大幅に減少しています。

日本酒の国内出荷量の推移

	10年	15年	20年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	元年	2年 (1~8月) 対前年同期比	
日本酒国内出荷量	1,133	871	659	580	566	555	540	533	495	467	236	87%
特定名称酒	291	221	174	164	167	173	178	179	171	165	78	82%
吟醸酒	34	30	20	21	24	25	24	24	23	22	10	82%
純米吟醸酒	25	26	24	29	32	37	42	45	45	45	23	83%
純米酒	62	54	57	58	59	62	65	67	64	62	31	85%
本醸造酒	169	111	73	56	52	49	46	43	38	35	15	74%
一般酒	842	650	485	416	399	382	362	353	324	302	158	90%

資料：日本酒造組合中央会調べ。年は暦年。

注1：清酒は、一般酒のほか、原料米及び製造方法等の違いによって吟醸酒、純米酒等8種類に分類され、これらを総称して「特定名称酒」という。一般酒は日本酒国内出荷量から特定名称酒の数量を差し引いて算出。

2：国内出荷量には輸出量は含まれていない。

日本酒の輸出状況

- 日本酒の国内出荷量が減少傾向にある中、輸出については、海外での日本食ブーム等を背景に増加傾向にありました。また、日本酒の全出荷量に占める輸出量の割合は約5%にまで増加してきました。
- 令和2年については、新型コロナウイルス感染症の世界的なまん延等の影響により、輸出数量が対前年同期比▲31%と大きく減少しています。

日本酒の輸出量の推移

	10年	15年	20年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	元年	2年 (1~8月) 対前年同期比	
日本酒輸出量	8	8	12	16	16	18	20	23	26	25	12	69%
アメリカ合衆国	1	2	4	4	4	5	5	6	6	6	3	68%
中華人民共和国	0	0	0	1	1	2	2	3	4	5	2	69%
大韓民国	0	0	2	4	3	3	4	5	5	3	1	28%
台湾	4	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	100%
香港	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	121%
その他	2	2	3	4	4	5	5	6	6	6	3	73%

資料：「貿易統計」（財務省）。年は暦年。

以上のほか、詳細な情報は、以下URLにより「日本酒をめぐる状況及び酒造好適米の需要量調査結果」を参照ください。

URL : https://www.maff.go.jp/seisaku_tokatu/kikaku/sake.html